
バカと花妖怪と召喚獣

ほし

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカと花妖怪と召喚獣

【NZコード】

N2082W

【作者名】

ほし

【あらすじ】

幻想郷から連れてこられた花妖怪こと風見幽香。彼女は果たして文月学園でどのように生きていくのか？

オリキャラも地味に出たりします。後はバカテスのキャラが能力を持つていたりとカオスな事になるためご用心を。

プロローグ（前書き）

もはやプロローグと言つていいのだろうか。

プロローグ

「ここは忘れ去られたものが集う場所、幻想郷。

「幽香、別世界に「断るわ」即答しなくてもいいじゃないの……」「アンタが絡んで口クな事があつたためしが無いのによく言えるわね……」

「本当ですよ……聞くだけ聞きますけど、どこに連れてくつもりだつたんですか？」

その中にある太陽の畠にはこの幻想郷を創り出した八雲紫、花妖怪こと風見幽香、そして数年前にこの世界に来た向日葵が立っていた。「確か……文月学園つて所があつた「行きましょうよ風見さん!!」

「どうしたのよ急に……まさか元いた世界とか？」

「ええ、そうですね」

「向日、もう準備はいいわよ」

「行つてらつしゃい、向「風見さんも行きますよー」「ええつーー？」

こうして、一人の文月学園での戦いは始まった……

プロローグ（後書き）

はい、開幕オリキャラ出ました。

次回は文月学園に入学させてその後キャラ紹介。

プロローグその2

少年少女移動中……

「家」

「着いたあつ！」

「…………（明らかに面倒な事になつた目）」

「あれ、風見さんどうし」「元祖」「マスタースパーク」「うわあああ
つー！」

「ちよつとやり過ぎたわね…………」

目の前に転がる気絶した人が一人。ちなみに家は多少壊れてもすぐ
直る仕様らしい。

「ま、どうせ回復するでしょ」

そういうつて散策に出かけた。

十分後。

「痛てて…………何もあそこまでやる必要はねーだろつよ…………」

葵、回復。

「そういうやあいつスペルカード使つてたけど俺も使えるのか？」

スペルカード：所詮必殺技的な物。けどそれ自体には何も効果なし。
要するにただの紙。

「じゃあ……写符」「鏡写し」「

すると、放つた弾が周囲に写し出される。
「クラッシ^{クラッシ}
破壊」

そして鏡が破壊され弾が数十倍の量になつて様々な方向に動き出す。
そして - - -

「ただいま……」

ドオン！

「あ

風見さんに直撃した。

「覚悟は……出来てるんでしょうねえ……」

一出来ません！」

結局捕まり、石畳の上で正座したまま五時間の説教をくらつた。どつかの説教が長い人でもこんなにはしないと思うが……

次の用

「……急ぐよ葵！」

たがひで足引張て痛たたた！」

現在
絶賛予ぎの流れ中
足引の張りれてるせいで後頭部が痺痛し

「扇見に向田 透努力」

卷之三

卷之三

時は過ぎる

「よし、入つてこい」

「私は風見幽香よ。花を大切にしなかつたら殺す：ちょっと厄介にな

何故か一名ほどルパンダイブで飛びかかった。まあ、

元祖「マスター・パーク」

はい、
気絶しました。

「ああ、俺か。俺は向日葵だ。^{むかいあおい}先に言つとくが俺男だからなー。」

そんなこんなで色々ありながら放課後の屋上。

「いるんだろ？スキマ妖怪」

「あらあら、何の用かしら？」

そう言って両端がリボンで止められたスキマから半分体を出すスキ

マ妖怪。

「分かってるだろ？アイツの事だ」

「ああ、あの吉井って子だっけ？多分、……」

「何かしらの能力を持つてるって事だろ？」

「ええ、あの幽香の攻撃を食らって何事もなかつた事からすると、何があるわね」

「そりゃ、さすがに細かい所は分からなかつたか」

あの吉井って奴、面白そつだな。そう思いながら家へと帰つた。

プロローグその2（後書き）

スペルカード紹介。

元祖「マスタースパーク」

人一人が余裕に入る太いレーザーを傘からぶつ放す。

写符「鏡写し」

一発の弾を様々な位置にある鏡に写し出し、クラッショ破壊のかけ声で鏡が割れて写った弾が実際の弾幕となる。

キャラ紹介したら一気に一巻まで時間をぶつとばす予定。

キャラ紹介

向日 葵
むかい あおい

二つ名：鈍感な心替わり少女

過去にこの世界から幻想郷に連れてこられた男。なんやかんやありながらも風見の家で暮らしている。結構モテるらしいが本人が鈍感すぎるため全く気づいていない。また、顔が中性的なせいで女子と勘違いされたり女装させられたりと散々な目に。

能力：精神を入れ替える程度の能力

その名の通り一人の中身を入れ替える。ただし、対象の一人に触れる必要がある。

得意科目：古典、世界史

苦手科目：なし

世界史、古典は大体500点前後。その他の科目も400点ぐらい。

召喚獣：黒いコートに打ち上げ花火の筒を持つ。また、200点消費してスペルカードを使う事ができる。

腕輪：憑依

一回につき50点消費。味方の召喚獣一体を対象にし、戦闘終了まで葵の点数、操作で戦う。

ここから原作キャラ 変わった所のみ書いてある。

吉井 明久
よしひ あきひさ

二つ名：鉄の切り込み隊長

能力：受けた力を吸収する程度の能力

ダメージを吸収し、自分の力とする。ただし、攻撃が強すぎると吸収できず、自分自身が受けていないといけない。

土屋 康太

二つ名／氣配の無いムツツリスクベ

能力：氣配を消す程度の能力

説明：特になし。

木下 秀吉

二つ名／声真似のホープ

能力：声を完璧に真似する程度の能力

一度でもその声を聞いた事があれば、完璧に真似する事ができる。
逆に聞いた事が無ければ出来ない。

キャラ紹介（後書き）

次回から原作スタート。

第1問 全ての始まり（前書き）

バカテスト第1問

問題

「調理のために火にかける鍋を製作する際、重量が軽いのでマグネシウムを選んだが、調理を始めると問題が発生した。この時の問題点とマグネシウムの代わりに用いる金属合金の例を一つあげなさい」

姫路瑞希の答え

「問題点…マグネシウムは炎にかけると激しく酸素と反応するため危険であるという点」

合金の例…ジュラルミン」

教師からの「メント

正解です。合金なので「鉄」では駄目という引っ掛け問題でしたが、姫路さんは引っかりませんでしたね。

土屋康太の答え

「問題点…ガス代を払つていなかつた点」

教師からの「メント

そこは問題じゃありません。

風見幽香の答え

「問題点…火力が足りない。マスタースパーク並みの火力でやるべ

き」

教師からの「メント

鍋ごと焼く気ですか？

向日葵の答え

「問題点……軽いという理由だけでマグネシウムを選んだ製作者の頭。そもそも鍋というのは軽さだけではなく、汚れの付きにくさ、熱伝導の効率などの様々な観点から選ぶべきであり…………（以下略）」
教師からのコメント
言ご過ぎです。

第1問 全ての始まり

時は過ぎ4月、俺達は2年生となつた。

2年生となれば恒例行事と言つてもいい、テストの点数が力となる召喚獣を使った試召戦争が行われる。現在俺は――

「何でアンタの時計止まつてんのよ！」

「知るかよそんな事！つてかお前飛んで行けよ！」

現在、全力ダッシュ中である。ちなみに俺は飛べない。だつて人間だもの。

「風見に向日、もつ少し余裕をもつて来い」

そう言つて目の前にいたスネ……じゃなくて西村先生。人間離れした運動能力、趣味がトライアスロンから鉄人と呼ばれている。正直この人妖怪なんぢやないかと時々思う。

「おはようございます、鉄人さん」

「おはようございます、スネーク先生」

「…………お前達は名前だけ覚えられんのか？まあいい、クラス分けの紙だ。受け取れ」

そう言つて自分の名前が書かれた封筒を渡してくる。そうそう、このクラスつてのは成績が良ければAクラス、悪ければFクラスつて具合になつてゐる。でもつてクラスによつて設備も変わる。Aには豪華に、Fにはボロボロつて感じに。で、その設備を奪い取るための唯一の手段がさつきの試召戦争つてやつだが……まあ、要するにいい設備にしたきや勉強しろつて訳だ。

「それにも風見に向日、惜しい事をしたな。お前達は確実にAクラスだと思つていたが…………」

「別に今回、俺は風邪ひいただけですしね」

「全く、こつちの苦労も考えなさいよ…………ま、私はFクラスで逆に良かつたけどね」

「珍しいな、Fクラスを望むのは」

「だつて、Fクラスとなつたら多分一番戦争に関わりがありますよね？戦いと聞けば……フフフ……」
「あ、スイッチ入ってるな、こいつ。って時間1分しか無いんですけどー！」

「そうか、お前はそんな奴だつたな」

その言葉を鉄人から聞いた直後、俺と風見はFクラスへと向かつた。

第1問 全ての始まり（後書き）

「展開が早すぎる」とのアドバイスを頂いたため、今回はじっくりとした感じで書いてみました。

風見「いくら早く書きたいからってそれじゃ本末転倒よ」

作者「…………否定できないな」

向日「そんな訳で次回！『花妖怪と皿』紹介》お楽しみにー（タイトルは変わる恐れがあります）」

第2問 俺と幽香をひとFクラス（前書き）

次回予告とは何だったのか。

第2問 俺と幽香をあとFクラス

現在、Fクラス前。「2・F」のプレートが折れかかってるあたり嫌な予感しかしない。

「さつさと入るか」

「ええ、それより荷物置いたら一回闘^やらない?」

「はいはい、……少しは手加減してくださいよ?」

ちなみに今まで幽香さんと600戦近くしたが1回たりとも勝ったことが無い。強すぎます。

「邪魔するぞ」

「早く座れ、このウジ虫野郎共」

やつちまつたな、雄一。

「へえ……? いい度胸じやないの?」

「ちょ、ちょつと待て……」

「ちよ~っと、向こうで○ H A N A S H I しましょつか?」

幽香さん＆雄一退場。

「全く……お主らは『元祖』マスタースパーク』」いつも通りじやのつ……」

「お、秀吉か。お前も「ぎやああああつ……」Fクラスか」

「そりなんじやが、何故お主が

「葵、時間も無いしさつさと闘つわよ」

「ああ、スペカは4枚でいいな?」

「ええ、それじやあ

「「スペルカード、セツト……」」

少年(?) 戰闘中……

「負けた……」

やつぱり負けましたよ。はい。改めて設備を見ると

卓袱台、畳、座布団。うん、なんて斬新な設備なんだ。で、HRS

タート。

「えー、おはよ／＼ぞいります。Fクラスの担任を務めます、…………福原慎です。よろしくお願ひします」

福原先生が薄汚れた黒板に名前を書こうとして、やめた。このクラスはチヨークすらろくに用意されてないのか。

「皆さん全員に、卓袱台と座布団は支給されますか？ 不備があれば申し出でください」

先生、この設備自体が不備です。

「座布団に綿が入つてないんですけど」

「我慢してください」

「卓袱台の脚が折れています」

「木工ボンドが支給されてるので、後で自分で直してください」

「窓が割れてて隙間風が寒いんですけど」

「ビニール袋とセロハンテープを申請しておきますので、後で直してください」

「これはひどい。しかも壁すら割れかけてるし…………今度にとりでも連れてきて修理頼むか？いや、魔改造されそุดからいいか。一週間前に花火の筒渡して「小型にしてくれ」って頼んだらライトにもなるつていう無駄な機能つけてバズーカになつて返つてきただし……」

「それでは、自己紹介をお願いします。そうですね、廊下側の人からお願いします」

第2問 俺と幽香さんとFクラス（後書き）

幽香：　　言い訳は？

作者：さとうひでこ

三
首

（廻をいたがれていた）

卷之三

葵：そんなわけで次回こそ自己紹介です。

第3問 花妖怪と自己紹介

「それでは、自己紹介をお願いします。そうですね、廊下側の人からお願いします」

「木下秀吉じや、演劇部に所属してある。今年1年よろしく頼むぞい」

声を完璧に真似する程度の能力を持つているが本人の演技力ゆえに正直『見たことのある人を完璧に真似する程度の能力』でいいと思っている。一応男らしい。（本人談）だが周囲からは女子扱い。

「…………土屋康太」

おう、いたのか。知名度があだ名のムツツリー——二つ名の気配の無いムツツリスケベ>>>本名という異常な式が成立してゐる男。ムツツリスケベに関しては否定してゐるらしいがバレバレである。にしても女子は幽香さん以外いないのかこのクラスは、まあ最底辺のFクラスだし

育ちはドイツだつたので。趣味は…………

あ、女子の声。少しばむさ苦しさが和らぐ

「向日を殴つたり女装させる事です」

代わりに俺が大変な目に遭いそうだ。

「はうはう～」

「よ、よろしく…………」

さつき自己紹介してたのは島田美波。下手に隙を作ろうものなら何かしら仕掛けてくる（時々幽香さんもついてくる）個人的には危険度SSSランクの人物である。

「向日葵だ。一年よろしく頼む」「風見幽香よ、一応この隣にいる バカと一緒に暮らして、『総員狙えええつ！！』

来て早々なんて核地雷を持ち出してるんだこの人は…！とは言つても焦る必要は無い。鞄からバズーカ（ライト付き）を取り出し

「見習』とろ火のマスタースパーク』」「全員氣絶しました。

「相変わらずアンタのは火力低いのね」

「そりや普通の人間ですから限界つて物がありますよ」

「けどどこかの泥棒は人間よ？」

「…………頑張ります」

俺は思った。そのうち人間やめるんじゃないかと。

「あの、遅れて、すいま、せ…………ん…………？」

そこには、本来いるはずの無い者、姫路瑞希がいた。

「あ～ちくしょう、死ぬほど眠い…………」

それを確認した後、俺は眠りについた。目を覚ますと

「Fクラスは、Aクラスに『試験召喚戦争』を仕掛ける！」

そうこのクラスの代表である雄一は言つた。

第4問 俺たちの勝機（記書き）

問題

以下の意味を持つことわざを答えなさい

- (1) 得意な事でも失敗してしまつ事
- (2) 悪い事があつたうえに、更に悪い事が起きたうえ

姫路瑞希の答え

- (1) 弘法も筆の誤り
- (2) 泣きつ面に蜂

教師からのコメント

正解です。他にも（1）なら「河童の川流れ」、「猿も木から落ちる」、（2）なら「踏んだり蹴つたり」や「弱り田に祟り田」などがありますね。

土屋康太の答え

- (1) 弘法の川流れ

教師からのコメント

シユールな光景ですね。

風見幽香の答え

- (2) 泣きつ面にマスタースパーク

吉井明久の答え

- (2) 泣きつ面に蹴つたり

教師からのコメント

君達は鬼ですか？

風見幽香からのコメント

いいえ、妖怪です。

向日葵の答え

（1） ひとつの川流れ

（2） 泣きつ面で幽香さんに遭つ

教師からのコメント

言いたい事があります。

風見幽香からのコメント

葵、後でじつへつお仕置きね。

第4問 俺たちの勝機

「FクラスはAクラスに、試験召喚戦争を仕掛けよつと思つ「勝てるわけがない」

「これ以上設備が落とされるなんて嫌だ！」

「姫路さんがいれば何もいらない！」

確かにAクラスの設備は魅力だ。しかし、負ければ設備が1ランク下がる事を考えるとこの反応は仕方ない。

「そんな事はない。根拠ならあるぞ」

「そう言つと雄二はある一点を見つめ - - -

「おい、康太。畳に顔をつけて風見のスカートを覗いていいで前に出てこい」

「…………（ブンブン）」

「ふえつ！？」

なあ、土屋。その能力もつと違つ方向に生かせよ。で、ムツシリーニ土屋にの説明が終わつて戻ろうとした所を幽香さんが思いつきり頭を掴んで、

「ていやつ！」

「…………（バタツ）」

全力の頭突きを食らわせた。ああ、慧音さんを思い出すな。幻想郷の人里に来て初めて見た光景が頭突きだつたしなあ…………

「それに、向日葵や風見幽香だつている」

あ、何故か呼ばれた。

「向日つて唯一鉄人と戦つて勝つた伝説を持つての噂の……」

いや、あれ実質引き分けだつたから。

「風見つてあの『文月のサディスト』と呼ば……すんません自分チヨーシくれてました！」

どうせ幽香さんが脅したんだろうと思ひながらその方向を見ると、

「…………チツ」

傘をしまいながら舌打ちする幽香さんの姿が。そんなどうだ

つて呼ばれるのに。

「葵、何か言つたかしら？」

「イヤ、ナニモイツテナイデスヨ？」

危ない危ない。あの人（？）心でも読んでるのかつてぐらいの事言つてくるから怖い。

「それにあの二人、学年主席クラスはなかつたか？」

要約すると、俺・どれも大体400点台。結構安定。

幽香さん：

単科で1000点超えることもある。

ただし死んでる教科は死んでる。

「当然俺も全力を尽くす」

「坂本つて、確かに小学生のころは神童とか呼ばれてなかつたか？」

「それじゃあ、実力はAクラスレベルが4人も居るつてことかよ！？ もしかしたらやれるんじゃないか？」

「ああ、なんかやれそうな気がしてきた！」

バーロー、神童つて言つても所詮過去のものでしかない。実質3人と考えたほうが良いな。

「それに、吉井明久だつている

シーン……

「…………」

「…………」

「…………」

「…………」

「…………」

「…………」

「…………」

「そんな事は「大体そうだな」？」

「坂本、ミーティング行くぞ」

「待て、その前に宣戦布告だ」

「ちょっとー？せめてまともな紹介ぐらいしてよー。」

「吉井、Dクラスに宣戦布告してこい」

「無視！？……それに、宣戦布告の使者つて大体酷い目に遭うよね？」

「だつたらなおさら行かな……」

その時吉井の耳元で、

「（吉井、姫路は危険を顧みない男らしい奴が好きらしいぞっ。）」

そう言つた途端に

「わかつたよ、使者は僕がやるよ」

うん、実に単純だ。

数分後。

「ま、そうなるよな」

そこには、服（だけ）ボロボロな吉井の姿が。

（あ、そういうやこいつ能力持ちだつたな。『自分の受けたダメージを力にする程度の能力』が。）

「うし、ミーティングの時間だ」

そう坂本は言つた。

第5問 僕と補給テストとロクラス戦

屋上にて。

「で、吉井。開戦はいつから？」

「えつと、今日の午後から開戦って伝えてきたけど」

「そうなると、昼飯食べてから即戦闘って訳ね」

「坂本、このロクラス戦はどうするつもりなんだ？」

確かにそれは気になるわね。私、葵、姫路は試験を受けてからじやないと前線に出られないし、何より私達がいない間に代表がやられちゃあ意味が無い。それに先の事を考えるとできれば私達の存在は隠しておきたい。

「ああ、今回は姫路に決めてもらおうと思つ」

「わ、私ですかっ！？」

「成程、その代わりに次の戦いじゃあ俺達が暴れちゃつていいって事か？」

「ああ、構わない」

正直出れないのは不満だけど次は思いつきりできるしいいや。

「よし、今回の作戦だが - - -

そして、作戦会議が始まった。

午後。

「.....」

現在、テスト中。

「さあ来い！この負け犬が！」

「て、鉄人！？嫌だ！補習室は嫌だっ！」

「黙れ！捕虜は全員この戦闘が終わるまで補習室で補習だ！終戦まで何時間かかるかわからんが、たっぷりと指導してやるからな」

「た、頼む！見逃してくれ！あんな拷問耐え切れる気がしない！」

「拷問？これは立派な教育だ。補習が終わる頃には趣味が勉強、尊敬するのは一宮金治郎といった理想的な生徒に仕上げてやろう」「だ、誰か助け」「

鉄人さん？人はそれを洗脳つて言つんですよ？

さらに時間は経ち……

「俺一人かよ……」

試験の終わった姫路はDクラスにばれない様に幽香さんが空飛んで運んできました。さて、そろそろ決着が

「連絡いたします。船越先生、船越先生。吉井明久君が体育館裏で待っています。教師と生徒の垣根を越えた、男と女の大事な話があるそうです」

つきそつだな、うん。吉井の命はともかくとして。

大体の生徒が下校する時間。

「うおおおお！！」

お、決着ついたみたいだな。多分Fクラスの勝利だろうけど。

「ま、俺はさつさと帰るとしますか」

「Bクラスの設備を壊す代わりに設備交換は無しにした？」

「ええ、そうみたいね」

うーん、設備交換をしないのは恐らくモチベーションの維持だとしても何でBの設備なんかを壊す指示をしたんだ？

「で、設備を壊す理由は分かるか？」

「知らないわよそんな事。何でも次の戦争で重要らしいけど……」

何を考えているのかますます混乱してきたなオイ。まあ、細かい事

は明日考
えるか。

第6問 僕と昼飯と死を見せる弁当

「良かつたらどうくん食べてくださいね」
女子からの手作り弁当。それを聞いて食べない男はいるだろ？
しかし、俺たちは食べない。いや、食べられる状況で無かった。そ
う、目の前にある弁当は

「…………（ガクガク）」

人を殺しかける程度の弁当であった。

（今から数分前）

「よし、昼飯を食いに行くな！ 今日はラーメンとカツ丼と炒飯とカ
レーにすっかな」

えつと、確か文月学園だよな？ そのメニューはてっきり幽々子さん
専用かと思っていたがそうじゃなかつたか。

「あ、あの。皆さん……」

「あ、姫路も一緒に学食行くか？」

「あ、いえ、えつと…………お昼なんですか？ 昨日の約束で……」

昨日の約束、昼飯を元に脳内検索にかける。

「おお、もしや弁当かの？」

ああ、そういうえばそんな事あつたな。

「は、はい。迷惑じゃなかつたらどうぞ」

そして雄一、島田は自販機に飲み物を買いに行き、今に至るわけだ
が

「（幽香、どう思う？）」

「（少なくとも普通の弁当ではなれつね）」

「おう、待たせたな！ へえ、こりや昼飯をうじやないか。どれどれ？
最悪と言つてもいいタイミングで登場の雄一。そして、卵焼きを口
に放り込む。

「「あつ、雄一ー!？」

バタン ガシャガシャン、ガタガタガタ
ジュースの缶をぶちまけて倒れた。雄一、お前の事は（二分ぐら
いは）忘れないよ。

「さ、坂本!？ちょっと、どうしたの!？」

雄一が目で話しかけてくる。

「（毒を盛つたな?）」

失礼な。

「（毒じゃない、多分姫路の失敗だ。それに毒を盛るにしても一撃
で殺すぐらいのやつにしてるつての）」

「（随分と物騒だなオイ!）」

「姫路、この中に何が入ってるの?」

そう幽香さんが聞く。回答によつちや姫路が死ぬな。

「えつと、酸味がほしかつたので、硫酸を……」

とりあえず卵焼きに酸味なんてのはいらないしその上料理に薬品
つてどうこう事だよ。

「へえ……ねえ、ちょっと話があるんだけど」

あ、この声と笑顔からすると説教1時間程度で済むな。

「で、次はどこを落とすんだ?」

「次の目標はBクラスだ」

そういうやつクラスとの交渉で空調をビートたらこーたら言つてたな。

「どうしてBクラスなの?目標はBクラスなんでしょ?」

「正直言おつ。どんな作戦でもつちの戦力じゃAクラスには勝てや
しない」

「成程、Bを利用して連戦に持ち込もうつて訳か。そいじゃ、行つ
てくれるぜ」

Bクラス前。

「俺たちFクラスはBクラスに対して試合戦争を申し込む」「ハツ、Fクラス」ときが何を言つてゐるんだ?ボコボコしちまつぜ?」

「何を言つてゐるんだ?てめえら!」とき潰すのは簡単な事だ」「そして、Fクラスに戻ろうとする。

「待てよ、そう簡単に終わらせるとでも思つてんのか?」「デスヨネー。

「上等だコラ。テメエら三下!」とき束になつても怖かねえんだよ」

「そんな事、今にも言えなくしてやるよ!」

相手は大体30人。敵は前方のみ。ならこれでいいか。

「見習』とろ火のマスタースパーク』

はい、全滅。

そして何事も無くFクラスに戻つた。

第7問 俺とスペカとBクラス戦（前書き）

以下の文章の（ ）に正しい言葉を入れなさい
「光は波であつて、（ ）である」

姫路瑞希の答え

「粒子」

教師の「メント
よく出来ました。」

向日葵、風見幽香の答え

「マスター・パーク」

教師からの「メント
そう書くと思つてました。」

第7問 俺とスペカとBクラス戦

次の日。

「午後はBクラスとの試召戦争に突入する予定だが、殺る気は十分か？」

「「「おおーっ！」」」

おい、殺すなよ？間違つても殺すなよ？

今回の作戦は向こうを教室に押しこむ単純な作戦。そのためBクラスのある新校舎とFクラスのある渡り廊下戦では護衛を除く全員を投入するらしい。

キーンゴーンカーンゴーン

昼休み終了のチャイムが鳴る。

「よし、行つて来い！目指すはシステムデスクだ！」

「サー、イエッサー！」

Bクラス戦が始まった。

「いたぞ、Bクラスだ！！」

「高橋先生を連れているぞ！！」

高橋先生って事は総合科目での勝負。こつちは相手に文系が多いってのもあって数学の長谷川先生。この人何故か召喚範囲が広いんだよね。そうそう、前線指揮が俺、部隊長は明久と秀吉らしい。

「10人とはなめてかかつて来てるな……生かして帰すな！前線部隊突撃！」

Bクラス 野中長男 総合1943点

VS

Fクラス 近藤吉宗 総合764点

Bクラス 金田一祐子 数学159点

VS

Fクラス 武藤啓太 数学69点

やつぱり格が違うな。へ？無駄に犠牲になつた？いや、あれは必要な犠牲のはず。……多分。

「前線部隊は一旦引け！俺が援護する！」

俺の召喚獣は動きやすく改造された学ランに打ち上げ花火の筒（片手で支えられるほど小型）

Fクラス 向日葵 数学421点

VS

Bクラス 野中長男 数学192点

Bクラス 金田一祐子 数学159点

「なつ！？」

そりやそうだな。Aクラス並の点数なんだから。

「……けど近づけば何も出来ないでしょ！」

成程。これを砲撃用として読んだか。けどな、

「おらつ！」

こいつは殴るために存在するんだよ！

「「「えええええっ！？」」「」

「いや、これって……普通だろ？」「

「「「どこが普通だ！」「」」

この瞬間だけ、FクラスとBクラスの息があつた気がした。

Bクラス 金田一祐子 数学0点

余談だが、今の一撃で相手の召喚獣は天に召されていた。

「お、遅れ、まし、た……ごめ、んな、さい……」

「まだ一人しか倒していないの？それとも……私の為に残しておいて

試獣召喚！
サモン

くれたの？」

そこにメイン火力の姫路と幽香さんが到着。これで勝つるー。

「来たぞ、姫路瑞希だ！」

「全員でかかれ！」

「悪いな、姫路に幽香。早速向かつてもうえるか？」

「は、はいっ。行つて、きます」

「はいはい、試験召喚^{サモン}つと」

Fクラス	向日葵	数学421点
Fクラス	風見幽香	数学502点
Fクラス	姫路瑞希	数学412点
VS		
Bクラス	岩下律子	数学189点
Bクラス	菊入真由美	数学151点
Bクラス	その他7名	数学平均181点

「嘘でしょー！？何であんなのがFクラスにいるのよー。」

「姫路、全力でかつ飛ばせ！」

「は、はいっ！」

姫路の召喚獣が腕輪のついた左手を前に出すと、腕輪から光線が放たれる。

「じゃあ私も行きますか！幻想式決闘流儀、携帯獣『種乱射銃』！」

そう言うと幽香さんの足元から花が出てくる。そして、一斉に種を発射した。

……なあ、これどう考へてもポンのタネマシンガンだよな。

「暴れ足りねえなあ！写符『鏡写し』」

こつちは召喚獣本体の能力で撃つ。ただ一回200点なんだよなあ

……

まあまだ生きてる召喚獣もいる」とだし、

「姫路、幽香ー！」

「ええ（はいっ）！」

姫路は左手を前に、幽香さんは持つてゐる傘を前に、俺は花火の筒を構える。どうでもいいけどよく傘まで再現したよな。

「――協力『トリオ・ザ・スーパーク』――」

前方を埋め尽くす巨大な光線。つてかこれオーバーキルだよな。

Fクラス	向日葵	数学21点
Fクラス	風見幽香	数学300点
Fクラス	姫路瑞希	数学312点
VS		
Bクラス	岩下律子	数学0点
Bクラス	菊入真由美	数学0点
Bクラス	その他7名	数学0点

「今だ！Bクラスに攻め込め！」

「うおおおおっ！」

まあ、こんなもんだな。

第8問 私と人質と彼の能力（前書き）

やつと葵が能力使用。正直このぐらいしか使い道の無いよつたな
では、第8問どうぞ。

第8問 私と人質と彼の能力

「こいつはひでえな……」

Fクラスに戻った俺の目の前には穴だらけの卓袱台、へし折られたシャーペンに消しゴムが。

「酷いね。これじゃ補給がままならない」

「うむ。地味じゃが点数に影響の出る嫌がらせじゃな」

「それにしてもやる事が地味ね。やるなら教室壊すぐらい」

「「「それはやりすぎだ（じや）」」

いや、実際この人やりかねないけどね。

「あまり気にするな。修復に時間はかかるが、作戦に大きな支障はない」

そこに、代表である雄二が割り込んでくる。

「雄二、わざわざ教室を空にするとはお前らしくないな」

「協定を結びたいと言つてきてな。それで教室を空にしていた」

「協定？」

「ああ。4時までに決着がつかない場合、戦況をそのままにして手続きは明日午前9時に持ち越し。その間は試召戦争に関わる一切の行為を禁止するってな」

「それ、承諾したの？」

「そうだ」

何か妙だな。あの卑怯で評判の根本がこれだけで終わらせるはずはないと思うが気のせいか？

「大変だ、坂本！」

「ん、どうしたんだ？」

「島田が人質に取られた！おかげあと二人なのに攻めあぐねている状況だ」

だよなあ！終わるわけ無いと思ったよ。

「そうか……葵、風見！島田を頼んだ！」

「了解。さて、幽香、どうある?」

「ええ、
ムツツリーーー、 盗聴器と受信機を2セットお願いでき

109

…すぐに用意する」

「《こちら葵。現在Aクラス教室内だ》」

卷之三

「そこで止まれ！」 それ以上近寄るなら召喚獣に止めを刺して、こ

現在、Bクラス前。

（風見さん、どうする？）

そこで、前線へと出る。

「Bクラスの皆さん、ごきげんよう。そして
ンバーを人質にすることは、いい度胸ねえ？」
ウチのクラスのメ

.....

ほんのちゅうとだけ妖力を表に出すだけで退いてくれるし、
ね。そしてこの距離なら、
樂な物

Aクラスの扉が勢いよく開く。

「だ、誰

「お、おこ…どう…う事だよ…?」

その瞬間、葵の手が相手の肩へと触れてわずかに光を発した。

「全軍……突撃いつ！」

それと同時に島田の召喚獣を捕らえていたうちの片方が離れる。これなら行ける！

「試験召喚！」

Fクラス 風見幽香 数学300点

VS

Bクラス 鈴木一郎 数学31点
Bクラス 吉田卓夫 数学18点

「……まったく話にならないわね」

躊躇無く突きをかまし、あの二人は補習室行き。行く直前に葵が能力解除してたし大丈夫ね。

その後、私と葵は補充テストを受けて4時となつた。

第?問 一つの難題（前書き）

問 以下の問いに答えなさい。
「ベンゼンの化学式を答えなさい」

姫路瑞希の答え

C₆H₆

教師からの「メント
簡単でしたね。」

向日葵の答え

C₆H₆（いい感じの答えが思いつかなかつた）

教師からの「メント
真面目にやつてください。」

風見幽香の答え

知らない。

教師からの「メント

わざわざ書かなくても良いです。

土屋康太からの答え

ベン+ゼン=ベンゼン

教師の「メント

君は化学をなめていませんか。

吉井明久の答え

B - E - N - N - E - N

教師からの「メント

後で土屋君と一緒に職員室に来るよ。

第?問 一つの難題

現在、午後4時30分。協定通り休戦中である。

「さてと、戦況はどうだ？」

「計画通り向こうの教室前まで攻め込んだが、こちらの被害も少くないな」

「しかし、どうした物だ……？」

「そう、あの協定はこっちに有利すぎるのだ。恐らく何かを仕掛けているはずだが……考えすぎか？」

「葵に風見、Cクラスに行くぞ」

「急にどうしたんだ？ 雄一」

「Cクラスに怪しい動きがあった。念のため不可侵条約を結びに行くところだ」

「成程、俺たちはその護衛つて訳か」

そして、姫路、康太、雄一、明久、幽香と共にCクラスに。

「Fクラス代表の坂本雄一だ。このクラスの代表は？」

「私だけど、何か用かしら？」

確かにCの代表はヒステリーな小山だっけ。

「Fクラス代表としてクラス間交渉に来た。時間はあるか？」

「クラス間交渉？ ふうん……」

「ああ。不可侵条約を結びたい」

「不可侵条約ねえ……どうしようかしら、根元君？」

……つ！ まずい！

「代表！ 急いで撤退しろ！」

「逃がすな！ 坂本を討ち取れ！」

よりもよつて向こうの連れているのは長谷川先生、すなわちフィールドは数学。いくら回復したとはいせせいぜい半分程度。勝つのは難しい。

「（幽香、点数はどうだ？）」

「（大体アンタと同じくらいよ）」

くつ、こんな時に腕輪が使えないってのは辛いな。せめてもう一人いれば……

「はあ、ふう……」

流石に姫路には全力疾走を続けるのはきつかったか。

「数学に自身のある奴以外は即座にFクラスに行け！明久、お前は背負つてでも姫路を運んで行け！」

「姫路さん、ごめん！」

「ふえつ！？」

……まさか本当にやるとは思わなかつたぞ明久。まあいい、残つているのは島田に幽香と俺か。

「「「試験召喚！」！」

Fクラス 島田美波 数学171点

Fクラス 風見幽香 数学176点

Fクラス 向日葵 数学221点

VS

Bクラス モブ5人 数学平均189点

人数も何も不利か。こうなりややるしかねえ！

「島田に幽香、後を頼む！」

出来れば明日までとつておきたかつたスペルだがこの状況じゃ仕方ないな。

「とある商人は言った。『この矛はどんな物も貫ける』と、またある場所では『この盾はどんな物も防ぐことが出来る』と。そこで一人が言つた、『その矛でその盾を突いたらどうなるのか』これが『矛盾』の由来 難題『全てを斬る剣と全てを防ぐ盾』『たかが装備が変わつただけだ！行くぞ！』装備が変わつただけ？笑わせる。

「おらあ！」

全力で斬りつけるが、相手もガードする。しかし

ザシユツ！

Bクラス モブA 数学0点

「言つたろ？この剣は全てを斬るつて
もつとも、このスペル60秒しか持たないんだけどな。
「くつ……」

遠距離から銃での攻撃を仕掛ける召喚獣。それを見て剣を消し日の
前で手を振る。するとその軌道上に壁が現れる。

「甘いつ！」

踏み込んで躊躇無く切り裂く。

「葵、こっちも終わつたわよ

「こつちもよ

「何も被害は無し、つて所か。戻るぞ」

第?問 一つの難題（後書き）

スペルカード紹介

難題『全てを斬る剣と全てを防ぐ盾』

葵のスペルカード。宣言すると、剣が具現化。その剣はあらゆる防御を無視して相手に致命傷を負わせる。目の前で手を左右に振ると軌道に合わせて盾が出現。その盾はマスター・パークすら完全に防ぐ。

ただし、剣のある状態で盾を出さうとする強制的にスペルブレイク（スペルの効果終了）となる。

ぶつちやけ相手が攻めに特化すると弱いスペル。

今更ながらスペルカードについて。

→ 召喚獣式スペルカードルール

一、戦争開始30分前までにどのスペルを使つか学園長に申告すること。申告の無い場合は最後に申告した組み合わせとする。

二、スペルブレイクについては以下の場合となつた時。

二・壱 スペルカードの切り替え時、前に使つていたスペル

二・武 スペル発動時から相手の攻撃により50点以上減らされる

二・参 スペルカード発動から一定時間の経過

三、壱の場合、通常スペルにおける参の場合、その日は該当するスペルを使用不可能とする。

四、式の場合、もしくは耐久スペルか武器変化のスペル時において参の場合となつた時、その戦争中は該当するスペルの使用不可。

五、その他は幻想境のスペルカードルールに準拠する。

第10問 処刑は汚さ根本の為に（前書き）

根本フルボツ一回。

第10問 処刑は汚き根本の為に

VSBクラス戦2日目

「今から昨日言った作戦を実行する」

「作戦つて、Cクラス対策のやつか？」

現在、8時30分。戦争開始には少し早い時間だ。

「ああ、その為に秀吉にこいつを着てもらひ」

そう言つて雄二は女子制服を取り出す。どこから仕入れたんだよそんな物。

「それは別に構わんが、ワシが女装してどうするんじや？」

秀吉、そこで断らないから女子だと勘違いされるんだと思つぞ。

「要するに木下（姉）になりきつてCクラスの矛先をAクラスに向けさせよつて事だら？」

「そういう事だ」

少年（？）罵倒中……（詳しくは原作一巻）

「Fクラスなんて相手にしてられないわ！ Aクラス戦の準備を始めるわよ！」

恐るべし、秀吉。つてもつ55分か。そろそろ開戦だな。

Bクラス前。

「ドアと壁をうまく使って 戰線の拡大を阻止して…勝負は極力単

フィールド

教科、補充も念入りに！」

「「「「サー、イエスサー！」」」

代表の作戦だと『教室内に敵を閉じ込めろ』つて作戦。今の所は順調だけど……

「…………」

うちのクラスの切り札の一角である姫路の様子がおかしい。

「（葵、姫路の様子がおかしい気がするんだけど……）」

「（やつぱりか。俺もおかしいと思ってた）」

とは言つてもその原因が見つからないことには解決しないし……辛い状況ね。

「右側出入口、教科が現国に変更されました！」

「数学教師はどうした！」

「Bクラス内に拉致された模様！」

くつ……現代国語じや私の点数は無いに等しい。これはなおむりきつくなつたわね。

「姫路、左側の援護を頼む！」

「は、はいっ！…………あつ…………！」

動こうとした姫路が急に動きを止める。その先には根本の持つている謎の手紙が。

「成程ねえ……葵？」

「ああ、あの野郎」

「「「絶対、ぶち殺す！」」

つて、あれ？

「吉井、まさかお前もか？」

「うん……姫路さんのためにも、絶対奪い返す！」

「じゃあ……教科が教科だし、私は別行動でいいかしら？」

「ああ、構わない」

私の出来る役目とすれば、本来の作戦、葵たちの攻撃方向以外からの第3のルートからの攻撃。

「全軍一時撤退！」

「逃がすな！」

「させやしねえよ。Fクラス向日葵、吉井明久が前のBクラス全員

に戦いを申し込む！

「―――― 試験召喚！」――――

Fクラス 向日葵 現代国語 460点

Fクラス 吉井明久 現代国語 71点

VS

Bクラス モブ×6 現代国語 平均132点

「憑依、対象は吉井明久！」

「まずはザコの吉井から殺るぞ！」

おいおい、仮に憑依してなくてもあいつはかなりの操作を誇る。仕留めるのは困難。しかも俺の腕輪で操作を犠牲にする代わり

Fクラス 吉井明久（向日葵） 現代国語 410点

VS

Bクラス モブ×6 現代国語 0点

俺の操作、俺の点数で戦うことになるんだよ！

「なつ！？」

「吉井、突撃だ！」

「ゴオッ！」

その瞬間目の前にレーザーが。こんなのを出せる奴は……

「流石ね、葵」

幽香しかいねえよな。

「くつ、近衛部隊！」

「葵、ここは私と吉井で引き止めるから先に行つて！」

「上等！さて、根本。楽しい 戰いの時間だア！」

「くつ…… 試験召喚！」

Fクラス 向日葵 現代国語 410点

VS

Bクラス代表 根本恭二 現代国語 191点

さて、ここで俺の能力の補足だ。俺の『精神を入れ替える程度の能力』つてのは元に戻った時

「蘇れ、悪魔の剣よ 記憶『レー・ヴァーテイン』」

条件はあるが、スペルを一枚コピーできる。

「くつ……！」

「あばよ、卑怯者

俺の剣が根本の召喚獣を一閃し、

Fクラス 向日葵 現代国語 210点

VS

Bクラス代表 根本恭二 現代国語 0点

Bクラス戦に決着がついた。

戦後対談。

「さて、それじゃ嬉し恥ずかし戦後対談と行くか。負け組代表？」

「…………」

「おお、さつきまでの強気な態度が嘘みたいね。

「本来なら設備を明け渡して貰い、お前らには素敵なちやぶ台をプレゼントする所だが、特別に免除してやらんでもない」

目標はAクラスだし、こんな所正直必要ない。

「けど、こっちの条件を飲んでもらえればだけどな」

「……条件は何だ？」

「条件？ それはお前だよ、負け組代表さん」

「俺、だと？」

「ああ、お前には散々好き勝手やつて貰つたし、正直去年からざわりだつたんだよな」

そのコメントにBクラスからのフオローは皆無。根本の人望がよく分かるわね。

「そこでだ。Aクラスに行つて、試召戦争の準備が出来ると宣言して來い。そうすれば今回は設備については見逃してやつても良い。ただし、宣戦布告はするな。あくまで戦争の意思と準備があるとだけ伝えるんだ」

「……それだけでいいのか？」

「根本クン？ それだけなわけ無いでしょ？」

「ええ、これを着ていつたらね」

そう言つて懐から女装セットを出す。「んな奴に使うのは勿体無いけどね。（本来は葵用）

「ば、バカな事を言うな！ この俺が、そんなふざけた事を！」

「Bクラス生徒全員で、必ず実行させよ！」

「任せて！ 必ずやらせるから！」

「それだけで教室を守れるなら、やらない手はないな！」

「……根本クン？ 一体何をやってきたのかな？」

「代表、その前にコイツを借りて行つていいかしら？」

「ああ、構わない」

「幽香、俺も一緒に行くぞ」

少年少女処刑中……

「すつきりしたわね はい、代表さん？」

渾身の笑顔で根本を投げ渡す幽香。

「風見、何で所々黒こげなんだ？」

「え？ ちょっとお話しただけよ？」

マスパー10発撃つたのにどこがちょっとしたのか問い合わせたいぐらいだよ。……まあ、俺が言えないけどな。（記憶『レー・ヴァ・テイン』で4～50回、ぐらい斬つた）

「そつか。じゃあ、さつさと着替えさせんぞ」「無視！？ まさかの無視！？」

「さて、今回はアソツも頑張つたし、……ってかそろそろあの一人には気づいて欲しいけどな」

そう俺は呟いた。

第10問 処刑は汚き根本の為に（後書き）

スペルカード紹介
記憶『レーグアティン』

とある悪魔の妹の弱体化バージョン。弾幕は出ないものの、威力に
関しては

難題『全てを斬る剣と全てを防ぐ盾』の剣と同等クラスの威力を誇
る。けつこう重いらしく、両手で持つのが精一杯らしい。

次回は皆田イベント。（のはず）

第1-1問 彼まで届け、私の想い（前書き）

今更ながら感想をくれた皆さん、ありがとうございます！

今回は作者の力不足を感じた回でした。……もつと上手く書けるようになりたい。

それでは、どうぞ。

第1-1問 彼まで届け、私の想い

「落とし物は持ち主に、つと……」

葵から預かつた根本君の制服の中にあつた封筒を手に持ち、僕は今Fクラスにいる。ちなみにあの制服は焼却炉で燃やした。別に元々焦げてたし変わらないよね？

そしてこの封筒を姫路さんの鞄に入れれば作戦終りよ

「吉井君！」

「ふえっ！？……ああ、姫路さんかあ……」

「あ、あのっ、その手紙ですけど……」

「あ、うん！今すぐ姫路さんに返すから

「返す必要はあつませんよ？だつて、その手紙は既に届いてるんですけどから……」

「へ？」

だつて、この手紙って雄一のためのものじや……そう思つていると姫路さんは顔を真つ赤にして頭を勢いよく頭を下げながら叫んだ。

「吉井君、ずっと好きでした！私と付き合つてくださいー！」

「…………え？」

「吉井君…………？」

「ほ、僕も、姫路さんの事が……大好きですーー！」

一方、教室の外では……

「上手くいったみたいね、葵？」

「ああ、俺が手を貸す必要も無かつたみたいだしな

「それじゃ、帰りましょ？」

「やうだな……うおつ！？」

戻ろうとした最中、何故か近くにおいてあつたバナナの皮で転ぶ俺。

「あやつー！」

で、その流れで幽香に倒れ掛かる。

「お、風見に葵。こんな所で何やつて 」

そこに雄一がやつてくる。まあ、状況の整理だ。俺は今、勢いで倒された幽香の上にうつ伏せで倒れている訳だ。他人から見れば、

「……さて、帰るか」

「せめて話を聞いてくれえええっ……」

俺が押し倒してるようにしか見えないよな。その後、30分かけて話をした結果、何とか誤解は解けた。こんな事で異端何ぢやらに追われるの御免だしな。そんな事があつて、

「…………」

「あの……怒つてます？」

非常に気まずい事になつてるんだ。

「……田を食いしばつて歯を閉じなさい」

「幽香さん、それつて逆「いいから早く！」ハイ……」

あ、じりや「伝家の宝刀の右ストレートだな。そう思いながら田を閉じる。

「…………」

来るであろう衝撃に備えて身を固める。すると不意に俺の頬に何か柔らかい物が押し付けられた。

「はい、もう開けて良いわよ」

「へ……？幽香、今のつて 」

「さあーて、ご飯の準備でもしないとね！」

まるで何も無かつたかのように振舞う幽香。一体なんだつたんだ？

第11問 彼まで届け、私の想い（後書き）

最後の最後に幽香さん『テレ』る。それでも気づかない葵。流石鈍感は格が違つた。

第1-2問 最後(?)の作戦会議

Bクラス戦の終了から2日後。

「まずは皆に例を言いたい。周りの連中に不可能だと言われていたにも関わらずここまでこれたのは、他でもない皆の協力があつての事だ。感謝している」

「お前らしくないな。雄一」

「ああ、自分でもそう思う。だが、これは偽らざる俺の気持ちだ」「けどまだ一番の問題であるAクラス戦が残つてゐるよ?」

「ああ、残るAクラス戦だが、これは一騎打ちで決着を付けたいと考えている」

「一騎打ちつていうと代表同士が一対一で戦うつてやつだっけか?だとしても勝機はほぼ無いに等しいはずだし、何かしら策はあるはず。」

「ふうん、で、誰が戦うのよ?」

「当然、俺と翔子だ」

「バカの雄一が勝てる訳……」

シユツ(雄一がカッターを投げる音)

ポンッ!(カッターと弾がぶつかる音)

パラパラ(カッターが粉々になる音)

「チツ……」

「そんな事してる暇があつたら説明したりどうだ?」

代表説明中……

要するに満点ありで向こうは『大化の革新』が出たら間違えるから勝てるらしいが逆を言えばたとえ出てもこちらが満点を取らなければ勝てない。……幽香に言つて勉強させるよつとくか。そんな訳で今、Aクラス前にいる。

「一騎討ち？」

「ああ、俺たちFクラスは、Aクラスに一騎打ちを申し込む

「断るわ。その勝負、私達にリスクしかないじゃない」

「ああ、そういうえば一騎打ちに関しては断れるんだったな。

「断つてもいいが、その時はBクラスが攻め込んでくるぜ? わざわざ2回も試合戦争をやるよりはこっちにのつた方が得策だろ?」

「……なら、一騎打ちを2回やるってことでどう?」

「うーむ、こっちの勝てる要素は姫路、俺、幽香、ムツツリーーー(後の二人は教科限定)と一応明久、雄二か。流石にギリだと不安だな。そんな2回なんてめんどくさい事するより、5回でいいんじゃないいか?」

「駄目よ。2回じゃないとこっちの勝てる要素が無いからね」

「どうにかして5本勝負に持ち込まないとな……あ。リスクはあるが一応案は思いついたな。

「なら俺と風見は出ないから5本勝負でどうだ?」

「うーん……その言葉を鵜呑みには出来ないし……」

「……受けてもいい」

「うおつ! ?」

「ああ、向こうの代表の霧島翔子か。

「……その代わり、一つ条件」

「何だ?」

「……負けたほうは勝つたほうの言つ事を何でも一つ聞く」

「ああ、上等だ。じゃあ細かい所を詰めるとするか。後でこんなこと聞いてなかつたとか言わないようにな」

「それはこっちの台詞よ」

で、結果的に。

・互いのクラスから代表者を5人選んでの代表戦とする。

・Fクラスは代表者に風見幽香、向日葵を入れることを禁止する。

なお、元々の代表者が用件等により出場が不可能となつた場合はこ

の限りではない。

- ・教科選択権はFクラス3回、Aクラス2回。
- ・以上の事に反した場合、違反したクラスの敗北とする。

「さて、こんな物でいいだろ?」

「……構わない」

「すいません高橋主任、これを預かってもらえますか?」

「了解しました」

「これでもう書き換えは出来ないって訳だ。2時間後にまた会おう」
そして、Fクラスへと戻つていった。

「幽香、雄一に日本史を叩き込むか?」

「この2時間でね……分かった、頑張つてみるわ」

「ああ、頼んだ」

「それと葵、」

「何だ?」

「あんな協定結んじゃつて……勝つ見込みはあるんでしょう?」

「ああ、向こうつ……いや、俺以外気づいていないが、

協定には隙がある」

そして、Aクラス対Fクラスの幕が上がる。

第12問 最後(?)の作戦会議(後書き)

次回、Aクラス戦。

第13問 絶対勝利の札 final spell attack

2時間後……

「では、両名とも準備は良いですか?」

「ああ」

「……問題ない」

Fクラスからは明久、姫路、秀吉、ムツツリー、雄一の5人が出ることに。

「それでは1人目の方、どうぞ」

「私が出ます。科目は物理でお願いします」

Aクラスからは佐藤美穂さん。そしてこっちからは

「明久、行つてこい」

「え!? 僕! ?」

「ああ、お前はここで出たなきや作戦に支障が生じる「

「ふう……。やれやれ、僕に本気を出せつてこと?」

「そうそう、それすぐだらない事言つたら潰すからね?」

「サー、イエスサー!」

ああ、幽香の威力だと明久の能力でも喰らうんだったな。(明久の能力は一定の上限を超えると発動しなくなる。)

「それでは、始めて下さい」

「試験召喚!」

Aクラス 佐藤美穂 物理389点

VS

Fクラス 吉井明久 物理 62点

5分ほど粘つたものの結局負ける。けど明久を使った理由は勝つた

めじやない。

「おいおい……こんなに苦戦するか？」

「い、いや、今のは偶然じゃないか？」

「そうだと思いたいが……」

そう、目的は相手の動搖。同時にそこに集中させる事で協定の穴を気づかせなくする作戦。

「では、二人目の方、どうぞ」

「じゃ、アタシがいくよ」

Aクラスからは木下（姉）。

「ワシがやるう」

そして、Fクラスからは秀吉。

「ところどさ、秀吉」

「なんじや？ 姉上」

「Cクラスの小山さんって知ってる？」

「はて、誰じや？」

うん、作戦通り。

「じゃあいいや。その代わり、ちょっとこちらに来てくれる？」

「うん？ ワシを廊下に連れ出してどうするんじや姉上？」

「ごめん、秀吉。後でプリンでも奢るから許してくれ。

「姉上、勝負はどうしてワシの腕を掴む？」

「アンタ、Cクラスで何してくれたのかしら？ どうしてアタシがCクラスの人達を豚呼ばわりしていることになっているのかなあ？」

「はつはつは。それはじやな、姉上の本性をワシなりに推測してあ、姉上つ！ ちがつ……！ その関節はそっちには曲がらなつ……！」

ガラガラ

木下（姉）が戻ってくる。

「秀吉は急用ができたから帰るつてさ。代わりの人を出してくれる

？」

プリンをパフHにしないと許してもらえない無いな。

「なら、秀吉が急に出れなくなつたんだし、私が出ても問題ないよね？科目は古典でお願いします」

「……………！」

この条約の一つ目の穴、それは代表の代理の場合は例外であること。向こうは多分『そんな事あるはず無い』と思つていただろうが、こつちはそれを見越して秀吉を入れたんだ。……もつとも、秀吉が危険な状態にあるが。

「それでは、始めて下さい」

「試獣召喚！」

Aクラス 木下優子 古典328点

「残念ね、古典は私も得意なよ

「…………葵、寝ていい？」

「せめて倒してから寝てくださいよ…………

「フン、あまりにも点数が高いから怖気づいたの？」

「何を言つてゐるの？恐怖を覚えるのは

Aクラス 木下優子 古典328点

VS

Fクラス 風見幽香 古典1011点

貴女の方よ

「…………何い……つ……？」

「信じられません…………」

その点数にFクラス、Aクラスは勿論、高橋主任すら驚いている。

……相変わらず古典じゃ点数おかしいな。

「せめてスペルで苦しまず葬つてあげる…………幻想式決闘流儀、『

幻想咲く花』」

まず適当な2点から十字にレーザーが出る。そして、「くつ……あの隙間を避けるのもつらいわね……」その適当な2点を中心に円状に2列弾が発射される。

30秒後……

「避け切れな…… もやああつ！」

まあ被弾した瞬間レーザー 円状にばら撒かれる弾 レーザー
と半永久的に続くわけだ。

Aクラス 木下優子 古典0点

VS

Fクラス 風見幽香 古典889点

「勝者、Fクラス風見幽香
これで1対1か。

第13問 絶対勝利の札 final spell attack (後書き)

スペルカード紹介

『幻想に咲く花』

風見幽香のラストスペル。ランダムに2点が選ばれ、そこから十字状にレーザーが放たれた後、選ばれた2点から円状に弾が放たれる。10秒経過ごとに選ばれる点が1箇所づつ増え、レーザーと弾の発射間隔も短くなる。

本編にも書いてある通り、一度被弾すると無敵が無い限り抜け出せない。そのため召喚獣バトルでは一回の試召戦争につき一度のみの使用、被弾から10秒後に強制解除となるが、それでも400点はダメージが入る。

上位スペルに『幻想世界の花畠』が存在する。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2082w/>

バカと花妖怪と召喚獣

2011年11月23日11時52分発行